

# Hospital & Clinic

## ST介入で経口摂取再開支援

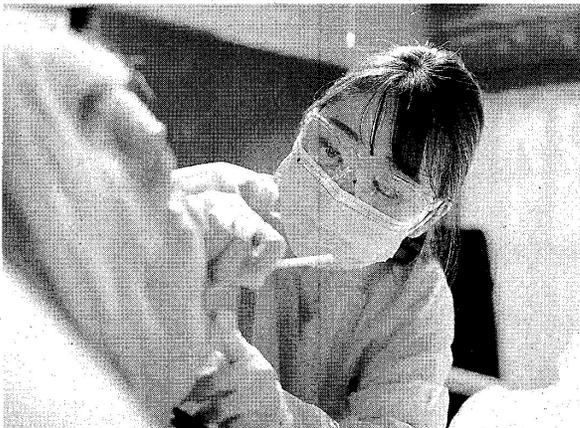
### 訪問リハで口腔機能改善

定山溪

札幌市南区の定山溪病院(成田吉明理事長、中西克彦院長・280床)は、訪問リハビリテーションにおいて言語聴覚士(ST)が中心となり、利用者の口腔環境・機能改善に注力。医師、訪問看護師などの多職種連携によって経口摂取を再開できたケースが増えており、そうした利用者では「意識レベル」「摂食時の姿勢」といった共通項がみられるという。

同病院リハビリ部門で、患者の日常生活のQOLは、患者の尊厳を第一に向上に向けた支援に力を据えた医療提供をチームに入れていく。その一環として、在宅患者の経口摂取後も、分院の溪仁会真駒内在宅クリニック(中川全真で口腔環境・機能改善院長・無床)と連携し、善に取り組んでいる。

経管栄養のみの絶食状態に退院した患者の中には、通院拒否などの理由で、嚥下内視鏡検査(V)や嚥下造影検査(V)を病院で行うことが難しいケースがある。そうした利用者でも経口摂取の再開を希望する場合、間接的嚥下訓練をはじめ、喉のアイスマッサージなどを行いながら、むせや湿性音を調べ、嚥下機能改善を図っている。



訪問リハ利用者の口腔内を定期的にチェック

CSII10以下で、意識障害がなく、食物を認識し開口ができる▼口腔ケアメント(OHAT)で舌や粘膜の評価が良好で、唾液処理ができ、痰量が少ない▼摂食時の姿勢が頸部屈曲位に設定可能で、飲み込みやすいボジションニングができる▼介護者である家族が「食べさせること」に協力的で、誤嚥性肺炎のリスクに対する理解が得られたことこの4点を共通ポイントとして挙げる。

また、医師、訪問看護

師などチーム内の連携を密に取ることを意識しており、「リハビリ目標や訓練内容を共有し、繰り返し話し合い、的確に食形態のレベルを上げていくことも重要」と話す。利用者全員の口腔内の状態をチェックしたところ、約6割がオーラルフ

ンネルであることなどが分り、歯磨きの重要性を伝えるなど、口腔環境の改善にも力を入れている。理学療法士や作業療法士も口腔内をチェックするようになったことで、普段から口腔環境に対する意識が高まり、同病院の歯科受診につながったという。

ケースがあるという。同病院では、23年にフールフレイルについて定期的に評価している。「今後も、本院と分院の連携を強化しながら、患者・利用者のQOL維持・向上につなげていきたい」。

## 学術振興、地域活性化

### 北斗帯広畜産大と連

帯広市で北斗病院などを運営する社会医療法人北斗(橋本郁郎理事長)は、帯広畜産大(長尾秀行学長)と学術的連携や地域社会の活性化に資することを目的とした連携協定を締結した。まずは、北斗病院の小児科外来に通院する児童を対象に、ホースセラピー事業を実施する。

同大での乗馬体験や馬のふれあい体験を実施。併せて精神的癒し効果に期待する研究を行い、その成果を教育現場にフィードバックする。また事業を通して馬文化の保全や新しい活用方法の提案、引退馬のセカンドライフ、生物多様性保全の促進といった効果も期待している。また、北斗が

定山溪病院

溪仁会真駒内在宅クリニック